

平成 24 年度 第 3 回文化芸術に関する意見交換会

- 1 日 時 平成 25 年 2 月 20 日（水） 17 時 00 分から 19 時 00 分
- 2 会 場 ときわ会館 5 階 小ホール
- 3 出席者
 - (1) 委員（13 名）

五十嵐健一、石上城行、大久保佐貴玖、齊藤茂、三須康男、宮本智子、
村木益実、山口聖子（以上 8 名）
（欠席：井藤仁、おかべりか、柴原早苗、花田陽介、山田登美男）
 - (2) 事務局（7 名）

市民・スポーツ文化局	和田局長
スポーツ文化部	野間部長
文化振興課	中村課長、織田課長補佐、鈴木主任、横溝主任
株式会社丹青研究所	大木
- 4 公開・非公開の別 公 開
- 5 傍聴人の数 1 人
- 6 内 容
 - (1) 開会
 - (2) 意見交換
 - ・文化芸術都市創造計画における施策について
 - (3) その他
 - ・さいたま市議会市民生活委員会から、文化芸術都市創造に関する提言が行われる予定
 - (4) 閉会

会 議 録

○意見交換[文化芸術都市創造計画における施策について]

石上委員長 それでは、次第2文化芸術都市創造計画における施策について、事務局より説明をお願いします。

事務局 資料説明

石上委員長 それでは、意見交換を始めたいと思います。
まず、基本施策の「1.文化芸術都市の創造のために必要な文化芸術活動の促進」についてご意見がある方は、挙手をお願いします。いかがでしょうか。

大久保委員 一つずつ進める前に、まず、8つある基本施策を概観して、論理的にどう分類できるかということを私なりに提案させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

石上委員長 どうぞ。

大久保委員 ここに8つの施策があり、非常に理想的な形で基本施策ができていると思っておりますが、この中には目的、手段、結果と色々なものが混ざっているのです、その辺を分類しておくとうわかりやすいのではないかと思います。

まず、1番は目的です。これは、最初に掲げられている「生き生きと心豊かに暮らせる文化芸術都市」という将来像の言い換えにあたるという点で、これを目的とします。それに対して、施策8は産業の振興や地域経済の活性化ということで、何かのイベント等を実施した場合に、こうした産業の振興等が図られる、つまり結果と考えられると思います。

そうしますと、施策2から7は何かというと、施策1の具体的な目的に達するための具体的な中間目的、あるいは手段とも言えるものではないかと思います。この手段というものが7つありますけれども、例えば伝統文化の保存や継承、新しいアートやシンボル事業を行うこと、教育普及、あるいは、施設の充実などもまさしく手段と呼べると思います。私なりにこのように分析させていただいたのですが、いかがでしょうか。

石上委員長 そのようなご意見がありますが、いかがでしょうか。具体的な進め方としては、上からやっていかざるを得ないかと思いますけど。

大久保委員 そうですね。ただ、全体を概観した形で、まずそういう印象を受けました。

村木委員 確かに、特に施策8のイメージは、全ての柱において意識しなければいけないし、結果としてこうしたことが生まれることにつながるということなので、大事なことですね。

石上委員長 整理していただいたので具体的なイメージがしやすくなったのではないかと思います

ます。恐らく、施策1は「事業展開例」にある担い手の育成やボランティアの育成など、人材を育てていくことをイメージされているのかなと思いますので、そうした視点なども踏まえて、施策1についてご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

<「施策1 文化芸術都市の創造のために必要な文化芸術活動の促進」について>

宮本委員 第1回の会議の時に申しあげたかと思いますが、誰が、どのような場で、どういうことができるのかという情報の収集を行い、また、情報を必要としている人や団体に対して、芸術家や団体の情報を提供するような取り組みが必要ではないでしょうか。

石上委員長 いわゆる情報基盤を整備して、それを集約して、誰もが、どこからでもアクセスできるようにということですね。

宮本委員 はい。

石上委員長 ほかに何かございますか。

三須委員 先ほど大久保委員のお話にもありましたが、施策1で言っていることは、将来像として、市民が生き生きと心豊かになれるようなことを目指すという意味なので、押しつけの支援というよりは、いかに市民が主体的に活動を継続できるかという環境をつくる施策だと思います。さいたま市には、サウスピアもできましたし、文化センター、公民館など色々な層の発表する場があります。発表する機会があれば、そこで反応を見ながら、ますます上を目指し、続けたいという意識が働くでしょうから、それぞれの施設の特徴に応じて、市民に発表の場をつないであげるような事業展開が必要であると考えています。

前回の会議の時に、秋に開かれている市民文化祭を1週間に圧縮して見せていくというようなことを申しあげました。その予選会ではありませんが、身近な公民館で少し競い合って、そこで選ばれた人が本選に出られるというような事業展開を考えていくのも面白いと思います。

石上委員長 それは、文化施設をつなげるための一つのアイデアですね。他にはいかがでしょうか。

村木委員 今、事業展開例では3つの例があがっていて、実際、将来的にはこうしたほうが良いということが述べられていると思います。現状として、三須委員がお話したようなことも含めて、ここにあがっている例に近いようなことは行われているのでしょうか。また、盆栽、漫画、人形、鉄道というさいたま市の4つの魅力ある資源がある中で、例えば鉄道博物館では、次世代の育成のような取り組みがあるのかどうか。行政として展開していった方が良い点だけではなくて、実際に現状がどうなっているのかを知りたいと思います。

石上委員長 鉄道ということなので、五十嵐委員にお聞きしたいのですが、人材育成の視点で何か取り組んでいることはありますか。

五十嵐委員 鉄道の基本的なことに関する解説などについて、J R・国鉄のOBをボランティアとしてお願いしています。それを次の世代に伝えていくことがなかなか難しいところであり、その点が課題と言えます。

石上委員長 事務局に伺っていいでしょうか。さいたま市として、それぞれの公民館をつなぐような何か、今、予選会のようなものというアイデアが出ましたけれども、そういう施設と施設をつなげるような仕掛けであるとか、特に人材育成について何か取り組んでいるものはありますか。

事務局 文化ボランティアの関係ですが、文化振興事業団で運営しているボランティア組織があります。例えば、文化センターでコンサートを開く際には、その案内をするとか、チケットのもぎりなど、コンサートの運営のお手伝いをしていただけるようなシステムはあります。

文化振興以外の事業では、浦和駅東口のコンナレ内にある市民活動支援室の事業で、マッチングファンドという事業があります。これは、区域を越えて、行政とNPOが協働で行う事業に対して、寄付と市からの積立による基金を活用して、補助を行うものです。今、お話がありました、例えば公民館対抗の句会とか、こうしたことを実施しようとするNPOなどが出れば、援助する仕組みはあります。しかし、なかなか寄付が集まらなかったり、このようなことを実行しようとする個人や団体がまだまだ多くないという状況です。

石上委員長 村木委員、いかがですか。

村木委員 私もコンナレはよく使っていますけれど、そうした制度があることを、今、初めて知りました。そういう意味では、市民への周知が不十分ではないかと思いました。寄付が少ないというのも、元々さいたま市に住んでいた方が少ないといえますか、外から転入してきた方が多いので、地元へ愛着がある方が少ないのかもしれないですね。

山口委員 この話が該当するかどうかはわかりませんが、さいたま市音楽家協会では、担い手を育成するための活動として、十数年続いているオーディションがあります。市民、あるいは市内在勤者で希望される方は、オーディションを受けて合格すると、会員として演奏会に出演できます。現在、会員は100人以上いますが、会員の中でボランティアも育成しており、自分が出演するだけでなく、他の方が出演するときはお手伝いをするとか、もぎりの他、会計や運営まで全部をボランティアで行います。今は補助金を活用しながら自主的に運営できるようになっています。少しずつですが、毎年のオーディションで新しい方も入ってきており、年齢層としては、80代から大学生や高校生もいます。

それから、公民館では、コーラスなど様々な事業がある中で、合唱の集いや合唱祭などは、ほとんどがボランティアで運営されていると思いますので、そういう意味では、土壌は十分にあると思っています。

齊藤委員 今、文化芸術活動に関するボランティアの話が出ました。NPOでも、山口委員のお話にもありました、個別に何かをしたい人たちの団体で活動しても良いのですが、

そこには、周辺で支えようという気持ちがあるのだと思います。市もこうした人材の育成・支援をするのであれば、大きなフェスティバルのようなものを発案して、それに向かって、ボランティアの人たちの支えが必要だという提示をしていく。つまり、最初にボランティアを育成しようとしても、目的がわからないということになりますから、先にゴールを設定して、これに向けて何かをつくりあげていくと良いのかなと思います。

盆栽、漫画、人形、鉄道などの文化は、ある程度、自分たちで育成して、確固とした存在になっているのではないかと思います。鉄道博物館などは、全国的に十分に認知されています。この成功を見て、色々な地域で同種の施設を設置しようという動きもあります。鉄道博物館がさいたま市にあることは十分に認知されており、こうした施設は、人を集めるという意味では核になれるものだと思います。

あとは、これを文化芸術のシンボルになるような試みで多くの人たちを集めて、そこに力を結集していく。この目的のためならボランティアになりたい、何かを支えたいと市民が思えるようなものを発案していくと具体的に方向性が定まってくるのではないかと思います。

例えば、「のぼうの城」という映画を制作したときは、市民がものすごく結集しました。これは目的が大変はっきりしていたわけです。ですから、これは、映画でも、音楽祭でも、演劇祭でも何でも良いのですが、そういうもので、今、さいたま市が実施するのに一番ふさわしいものを何か発案して、それに向けて、できるだけ市民の文化的な気持ちが集まるような方向性を求めることが近道かなと思います。

第1回の会議の時に配布された資料を見ると、さいたま市では、公民館から何から実に様々な事業や活動が行われていますね。そこには指導者もいて長年に渡って積み上げてきたものだろうと思います。こうしたものは、地域にふさわしい活動をさせてきているのでしょから、これらはそのまま継続していくべきだと思います。しかしながら、何かもっと多くの人々の気持ちを結集できるようなものを考えていく方が良いのかなと思います。

石上委員長　この後の施策6で触れますが、シンボリックな事業ということですね。ありがとうございました。

では、次の基本施策の2ですが、「文化芸術に対する子どもの感性の向上」というテーマについて、ご意見がある方は挙手をお願いします。

<「施策2 文化芸術に対する子どもの感性の向上」について>

事務局　現在、市や教育委員会は、音楽に関するアウトリーチ事業を行っています。市内在住の音楽家で、レベルの高い方に、学校に来ていただいて、そこでバイオリンやピアノを演奏していただき、子供たちにそれを聴いてもらう。プロの演奏を子供たちが聴くことで、音楽に関する興味を高め、楽器を奏でる素晴らしさを教えるという事業が既に始まっております。

山口委員　今の親御さんは、我が子が参加すると、非常に積極的に関わってきます。先日、うらわ美術館では小学校の絵画展をやっていますが、連日、結構な数の方が浦和美術館に来館していました。先ほどお話があった学校でのアウトリーチ事業など、さいたま市はすごく色々な取り組みをしていると思います。さいたま市の子供たちは、比較的、

聴く耳が鍛えられていたり、自分たちでも参加していたりということもあり、育成を充実していくということは、かなりできている部分もあるかと思います。

石上委員長 図画展などは、やはり良い例だと思いますが、その外側に広がっていないという気がしています。

山口委員 そうですね。例えば、音楽ですと多くの小学校で金管バンドが活動しています。学校に講師を招いて教えてもらおうと、子どもたちの気持ちも高まり、上達します。その上で、お祭りのパレードに参加するなどして成果を披露する。何かそういうようなことをしていくと、子供の文化的なエネルギーになっていくような気がします。

大久保委員 議論を少し遠目から見ていると、まず、人間がすることには、主体と客体があるので、その2つを考えていくと良いと思います。主体という視点で考えると、市民自らが行う発表や参加するという形で発信者となるということもあると思います。逆に、客体という視点で考えると、一流の文化芸術に触れたりして感性を高めるといった鑑賞者、享受者としての立場もあると思います。客体としての文化芸術ということを考えても、盆栽、鉄道、人形などは、伝統的な文化の部分と一流の芸術やアートという二側面があると思います。

つまり、4つのボックスがあるわけです。ですから、その4つのボックスを、漏れや重複がないように埋めていかないとバランスが崩れてしまうと思います。どちらかというと、盆栽、鉄道、漫画などにおいて伝統文化のほうに話が偏っていたり、あるいは、コミセンの活動をどう支えるかという発信者の側に議論が偏っていたり、どうしても小さくまとまってしまうことが多いですね。そうしますと、小さな市民文化祭のような方向性に進んでしまうのではないかと思います。

前回、シンボル事業については、事務局から横浜のトリエンナーレや神戸のビエンナーレのようなものを開催したいというような話がありました。そうした規模でないと、地域経済の活性化や産業振興につながってこないと思います。先ほどの話の繰り返しになりますが、横浜や神戸のような展開をしたいのであれば、4つの側面をきちんと整理した上でバランスをとって、まず、そうした方向に向かってはどうかと思いました。

石上委員長 おっしゃることはよくわかりますが、子供に関してはいかがでしょうか。

大久保委員 子供ということよりも発信者と享受者という意味で考えると、子供の発表の場ということと同時に前回も一流芸術の鑑賞の場がニーズとして高かったことが確認されたと思います。そうした場をどのように設けていくかということですね。

石上委員長 そうですね。

齊藤委員 現在、開催されているかはわかりませんが、以前、私と娘が南浦和の文化センターで行われた日フィルのコンサートに行きました。子供はコンサートを聴いて、オーボエとクラリネットの違いがわかったと言っていました。音楽的に言うと、音楽学校に入っても知らない子もいるのです。オーボエとクラリネットの違いがわからない人たちはたくさんいますが、小学校の娘はそれを知ってしまった。音色と形の違いを。こ

のように子どもたちに、強烈に何かを植えつけるものを展開していけば、それ以上、市が子供の教育に気を使わなくても、あとの子供の教育は学校の問題だろうという気もします。これ以上、色々と市が細かく対応していく必要があるのかなとすら思います。

このようなオーケストラの鑑賞は、学校ではとてもできませんから、それこそが市の仕事だと思います。こうした出会いが小学校の6年間で1回でもあった場合、強烈な印象として残ると思います。

例えば、コンクール的なもので言えば、合唱コンクールで浦和一女などは常連校で大変な成績を残しています。しかし、市が何らかのコンクールを開催したからといって、市のコンクールは目指さないでしょう。それから、NHKも合唱コンクールを主催していきまして、コーラスのコンクールであれば全地域からの小学校や中学校はこれを目指していますね。そうであるならば、そういうものはそこに任せておいて良いのかなという気もします。

でも、皆さんのご意見で、さいたま市、さいたま市民という中で、金管バンドのコンクールを開くという話になれば、それはそれで可能性があることかなとも思っています。もし、そうしたコンクールを開催して、それで皆さんが競い合って一生懸命にできるならば、そういうステップを用意してあげることは意味があると思います。思いますが、それもまたブラスバンドとなると、全国大会があって、中学・高校生はそこを目指していますよね。栄高校などは全国大会の常連で非常に強い高校です。彼らもとても忙しいですから、市が用意したコンクールに向かってきてくれるかどうか。市は、市としてできること、さいたま市をイメージさせる何かを生み出す必要があるだろうという気がします。それがあれば、それに向かって皆さんは年間の自分たちの生活の中で準備してやって来ると思います。

ですから、今までに積み上げられたものはもう完結していますので、あとは市として、新たにつくるもの、今後、展開していくものとしては、もう少し何かを生み出すという観点で、この会議は意見を交換していった方が良いのかなと思います。

石上委員長 さいたま市の子供たちが浦和一女の演奏を聴けるような機会があることが、この理念に沿ってくるのかなとも思いました。

山口委員 浦和一女のごことは私も申し上げましたが、優勝校や東日本大会への参加校、金賞受賞校がさいたま市の中には多くあるので、そこでしのぎを削るのではなくて、その優勝校がお披露目してくれるだけでも、全国レベルで見るとさいたま市はすごいと思われれます。スーパーアリーナのようなかなり集客数がある会場でも、演奏する力はあると思っています。

それから、齊藤委員が金管バンドのお話をされましたが、子供の感性の創造ということでは、本当にその中の何百分の1程度のことであっても、中学生や高校生になってから、ブラスバンドや全国大会などにつながっている人たちもいますので、軽視してはいけないと思います。

石上委員長 そうですね。既にある文化芸術資源を活用するという考え方ですね。

村木委員 今のお話は高尚な音楽芸術の話をなさっていて、ラジオからしてみると一般的ではないのですね。我々が、今の子供たちに対してすごく懸念しているのは、圧縮された

音源に慣れている子供が多いということです。スピーカーのダイナミックな音を聴けないのではないかと。スピーカーというよりはイヤホンで、携帯電話の音楽、いわゆる圧縮されたMP3音に慣れてしまっているのですね。数年前は、ラジオで使う音源にMP3音源はNGにしていたのですが、最近では使用しています。それは、データのやり取りに便利ということも当然ありますが、子供たちがそのような薄い音源といますか、圧縮された音源に慣れてくると、今のミュージシャン側も、圧縮された音源でモニターしてCDにするのです。そういう時代になってきたときに、それを果たして文化芸術のくくりに入れて良いのかどうか。

先ほど、ダイナミズムがある金管やオーケストラの話などをされていました。学校にバイオリニストを呼んで聴かせるという話もありましたけれども、今の子供たちは音楽に触れることが減っているのではないかと思います。

例えば、バイオリンは数百万円しますので、子供たちは簡単には弾けませんね。むしろ、身近にあるウクレレやギターなどに触れて、そこで生の音の違いをわからせるようにして、音楽の道に一步進んでもらうということの方が、必要になっているのかなと思います。

文化芸術の中に、例えばポップス歌手の歌は入るのか、入らないのかということもあると思います。その辺もデジタルが進化した中においては、非常に悩ましい部分ではあると思うので、そこも考えなければいけないと感じました。

村木委員　この前、ラジオの企画で、ある合唱が盛んな高校にお邪魔しました。そういった場所でも、アイドルグループは非常に人気があります。芸術をやっている人でも、アイドルグループのサインが欲しい。文化と芸術というものが、言葉として一緒になって良いのかどうかということは悩ましいところです。

石上委員長　それは世代の問題ですね。何となく芸術が上だと思っている世代と文化と芸術が並立している世代がある。上でも下でもない。そういう時代だからこそ「文化芸術」という言葉にならざるを得ないのだと思います。それはしようがないというか、別に悪いことではないと思います。

申し訳ありませんが、先に進めさせていただきます。3番目「伝統的・民俗的な文化芸術の継承と発展」について、ご意見がありますか。文化、芸術、伝統と、次々と要素が増えますね。

<「施策3 伝統的・民俗的な文化芸術の継承と発展」について>

宮本委員　岩槻の人形の伝統工芸を継承している方々がいると思いますが、それにかかる費用や手間は非常に莫大なものがあると思います。それらを継承していくためには、市からある程度の助成をしていただければ良いのかなと考えます。

石上委員長　文化は経済的な側面が必ずあるわけですが、サブカルチャーであれば収益ということもあり得ますが、それ以外は、基本的には営利的な活動ではないですし、その辺のことに何かご意見がございますか。

三須委員　今、岩槻の人形の話がありましたが、うらわ美術館で岩槻の小学校が図工の時間に、地元の伝統的な人形をつくった成果を展示するという企画があると聞きました。やは

り、その地域だけではなくて、地域を飛び越えて発表する機会があるとさらに子供の感性の向上にもつながるのかもしれないと思います。

今、3世代の縦の関係が少なくなっている中で、どのように地元の伝統を語り継いでいき、幼少期から自然に接することのできる機会を確保していくのかということは重要であると思います。例えば、こうしたことをヒントに、各区には色々な伝統文化がありますので、応用していくことを考えても良いのかなと思います。

石上委員長 今、割と学校教育で郷土教育に力を入れているので、そういう機会は大きいにつくっていけば良いと思います。段々と伝統的な技術を持っていらっしゃる方がご高齢になってきたりして、今はかなり危機的な状況になってきています。その辺に何か政策的な支援が必要になるかと思っています。

宮本委員 今、小・中・高レベルの話になっていると思いますが、幼児教育も非常に大事ではないかと思っています。例えば、川越市では幼稚園連合会がまとまって、毎年観劇会を実施しているということも聞いています。それを真似するというわけではないですが、そういう機会を子供のときに与えていただくと、強い印象を与えますので、その辺から考えていっても良いと思います。

三須委員 先ほどアウトリーチの話がありました。話が少し小さくなるかもしれませんが、全国的には子供が減っている中で、さいたま市は都心から引っ越してきた小さなお子さんを持つ世代が増えてきていて、児童が増えているという面があります。保育園などにアウトリーチとまではいなくても、地域でそういう技を持っている人や、音楽でも、お絵描きでも、墨絵でも何でも良いのですが、そうしたボランティア的な人を登録したりして、積極的に活動してもらおうと良いと思います。こうした活動は、ある意味では高齢者に生きがいをもたらすし、子供の感性の育成にもなるし、場合によっては、それが商売に結びつけば地域経済の活性化にもなるし、そうした地産地消的な動きが、アイデアとして出ても面白いと思いました。

山口委員 今の時期ですと、ひな祭りコンサートなど、ひな人形を展示しながら、あるいは、手作りで何か簡単なものをつくってみるとか、それにコンサートをコラボさせるのも良いのではないかと思います。

小・中・高等学校の教育の話が出ましたが、何年か前に中学校の指導要領が変わって、日本の音楽を取り入れなければいけないということになりました。それで、1日の鑑賞教室にしようとか、能の鑑賞をしようとか、各学校は苦勞しています。何かこういう動きの中に大宮の薪能ですとか、今、議論している伝統的・民俗的な要素が含まれていく方向性になってくると良いと思います。

大久保委員 「3. 伝統的・民俗的な文化芸術」と「5. 地域に根ざした文化芸術」の線引きが、私には曖昧に感じます。2つあって、しかも、施策3と5に離れた形で分かれていきます。どちらかというところらは、一緒に考えても良いものではないかという感じもします。

石上委員長 そうですね。施策5のほうにも「人形文化」がありますので、そういう意味では、確かにそうかもしれません。

事務局 施策3につきましては、地元の祭りや伝統的な行事を含む、伝統的・民俗的な文化芸術に関する後継者の育成・支援などを位置づけております。また施策5では、主に盆栽や人形などの地域に根ざした文化芸術資源の振興を想定しております。

大久保委員 わかりました。

齊藤委員 例えば中国地方の神楽のような強烈なものが、さいたま市にあるのでしょうか。もう一つ大きなイメージづくりにするための民俗的な文化芸術というものがあれば、バックアップしていった方が良いと思います。

<「施策4 文化芸術に対する理解及び関心の促進」について>

石上委員長 では、施策4に進みたいと思います。「文化芸術に対する理解及び関心の促進」ということで、これも全体に関係していることなので、個別には難しいかと思いますが、何かご意見はありますか。

大久保委員 この項目が、先ほど私が申し上げさせていただいた話に関係していると思います。4-1が受信者で、4-2が発信者ということです。ただ、今はこのように文化芸術に関するカテゴリーに属するものをあげていって、その一つひとつを積み上げたところで何か形ができるのか、結果として、この将来像が構築されるのか、私は、少し漠然とした言い方ですが、非常に疑問に思っています。もう少し何か中核になるものを決めたほうが良いのではないかとすごく感じます。

石上委員長 これはたぶん、4つにカテゴライズされたときの全体に関係していると思いますけれども、全体を貫いてのアイデアがあれば、ここで話しただけだと良いかなと思います。

宮本委員 先ほど齊藤委員からもお話がありましたが、今、さいたま市は色々なものを実施していますね。また、文化芸術資源もたくさんあります。問題は、市民の参加だと思っています。特にコンサート等に行きましても、大体シニア世代で、若者がいません。これは意識の薄さだと思っています。若者に、コンサートなどに行かない理由を聞いてみたら、やはり価値観が違うのだと思いました。今、コンサートなどの文化芸術に親しむよりも、ブランド品を買うとか、そうしたところに目が向いているわけです。ですから、大切なのは幼児教育で、その頃から培っていくものだと思います。それを、将来的に、どのように市民の参加につなげていけるかというところが、一番の焦点だと思っています。

大久保委員 「芸術」というよりも「アート」という少し広い枠で考えていく必要があると思います。「芸術」という言葉は、どうしても古典的な芸術の価値観のようなものが入ってしまって、若い世代や新しい世代をシャットアウトしてしまうと思います。「アート」とカタカナにしたときには、もっと広い、色々なコンサートなども入ってきます。要するに、何か価値観を植えつけて育てるというのではなくて、むしろ、価値観を取

り外して概念を広げる方向性が望ましいのではないかと思います。

石上委員長　例えば、今、音楽産業などでは、CDは売れないようですけどライブの収益は結構上がっているという話を聞いています。だから、若い人は若い人なりに生の音に触れたいという欲求はあるのではないかと思います。

村木委員　そこに関して言うと、若干間違いがあって、音楽のコンサートに関しては増えていることは事実ですが、これにはフェスティバルが含まれています。フジロックフェスティバルとか、オムニバスで行うものが含まれていまして、これはすごく収益があがっています。ただ、その中に出演した人が一人で行うコンサートは激減しています。

例えば、お盆の時期に、北海道で行うフェスティバルは、昨年実績で6万人入りしました。ただ、そこに出た人が北海道でワンマンコンサートを開くとお客は入りません。少し見ただけで、そのアーティストを見た気持ちになってしまう。その中の一人がコンサートを開いても人が入らない。だから、アーティストを抱えている事務所は、今、苦勞して、フェスティバルを運営しているイベンターは収益をあげているという状況かと思っています。CDは売れていませんし、配信は落ちていますし、厳密に言うとコンサートも落ちています。

宮本委員　ましてや、クラシックのコンサートなどはハードルが高くて、一人で演奏する音楽会には誰も行かないですね。だから、今、クラシックコンサートもトークを交えたりしていますね。やはり、そうした色々な要素が必要になってきているのだと思います。しかし、形をうまく変えていけば、やはりクラシックはクラシックです。

齊藤委員　この10年で、東京においてラ・フォル・ジュルネというクラシック音楽祭が開催されて成功しました。これは有楽町の東京国際フォーラムという、大中小と色々なホールがあるところで、しかも、コンサートは45分か50分位で、通常半額で鑑賞できる演奏会をたくさん行います。何日間かそこに凝縮し、複数の演奏会を聴くことができる仕掛けです。これは、一つの成功例かもしれません。

シンボリックな事業で、しかも多くの人を動員すると考えた時に、最初からポップスの歌手をたくさん集めて開催するものをつくれれば、ある程度は成功すると思います。しかし、さいたま市では、そういったものではないアイデアを出して、しかも、人を集め、イメージアップにもつながるような事業を行うべきだろうと思います。

さいたま市というのは、色々と積み上げてきたものもあって、相当のことを十分に実践してきているという印象があります。ですから、既に積み上げて確立されているものは、自分達で続けていっていただければ良いと思いますし、市が支援できるものは支援していくということ良いのではないかと思います。

<「施策5 地域に根ざした文化芸術に関する資源の発掘・保護・活用」について>

石上委員長　施策5は「地域に根ざした文化芸術に関する資源の発掘・保護・活用」ですので、何か具体的なイメージや考えなどがあれば、ご意見をいただきたいと思います。

村木委員　例えば、施策4のところでも「提供」という言葉がありますが、提供しても、動員

や接触率はそう増えない気がします。幼少期から、提供するだけではなくて強制的に鑑賞などをする機会をつくると、子供たちの文化芸術に対する気持ちに火がつく可能性があると思います。

また、施策5の「地域に」という言葉を含めていくと、これはやはり流行に乗るべきで、ゆるキャラをつくるのも良いと思います。音楽都市を宣言している郡山市は、「がくとくん」というギターを持っているキャラクターやその妹の「おんぷちゃん」というキャラクターをつくっています。このように、時代に乗ってPRして、若い子供たちが触れやすくすることも良いかなと思います。

石上委員長　ある意味、強制的に文化芸術に出会う機会をつくる必要があるということですね。ゆるキャラは意外と少ないですよ。やたらとつくっている地域もありますけど。

山口委員　根ざしたということで言うと、例えば盆栽は盆栽でどれもすばらしいのですが、小さな盆栽であっても子供たちにとっては高価なものであり、今の子供たちに根ざすのは難しいように感じます。地域に根ざした文化芸術を振興するに当たっては、盆栽でしたら、大切に育てるという行為を生きるということを学ぶ機会にするとか、何か子供たちを意識した視点がないと、地域に根ざした文化芸術と子どもたちとの距離が遠くなってしまうと思います。

宮本委員　事務局にお伺いしたいのですが、先ほどお話がありました、専門家が学校で演奏するというのは、どのように行われているのでしょうか。

事務局　上半年を体育館に集めて、演奏家の方に来ていただくという方法です。

宮本委員　それは、特定の学校ですか。

事務局　そうです。希望した学校です。

宮本委員　それはやはり費用もかかるわけですね。1人100円でも結構集まりますものね。

事務局　来場者の皆様から入場料はもらっていません。市が日本フィルハーモニー交響楽団に依頼をして演奏してもらっています。これ以外に、さいたま市文化振興事業団の事業として、音楽に関するアウトリーチ事業などを行っています。

事務局　盆栽に関する事業としまして、北区の植竹小学校で、盆栽師を呼んで、授業の一環として、全生徒が1個ずつマイ盆栽をつくっています。それを育てて、卒業式の時に持って帰る。こうした取り組みも行われています。さらに、大宮盆栽美術館では、卒業生たちが育てている盆栽について相談できる窓口を持っています。高校生になっても、年に何回か相談に来るお子さんもいらっしゃいます。

山口委員　自分でつくったマイ盆栽ですね。

事務局　盆栽ですから、一気には大きくなりません。高校生になってもまだ同じような形ですが、一生懸命に育てている方々もいます。こうした地道な文化の振興も実施してい

る状況です。

今、盆栽に関しては、外国人の愛好者の方が増えています。今後、ヨーロッパを中心とした諸外国への啓発、それから、日本に來られて東京のホテルなどに泊まっている方に向けて、ご案内のパンフレットなどを置かせていただくというようなことをしようとしています。

石上委員長 個別には色々な展開がありそうですね。では、本日の一番メインのテーマになるかと思いますが、施策6「多様な文化芸術に触れる機会の提供」これに関するご意見をいただきたいと思います。

<「施策6 多様な文化芸術に触れる機会の提供」について>

事務局 質問ですが、例えば合唱や演奏というのは、既に新聞社など全国大会を主催する団体があって、皆がそこを目指して切磋琢磨しているとお話がありました。皆が目指すような大会に必要なのは、いわゆる権威的なものなのではないでしょうか。今後、ある分野の中で、さいたま市が何らかの文化芸術の祭典を開く場合、そうした権威づけのようなことが、これから可能なのかという基本的な疑問があります。野球で言えば甲子園だと思いますが、過去からの長い歴史があってこそ、高校野球は甲子園を目指す形になっていると思います。

齊藤委員 今のお話ですが、権威というよりもプロ野球の選手がアメリカの大リーグを目指すのと同じで、頂点に向かって自分たちが努力していることをぶつけてみたい、それで、自分たちはその中でどう勝ち上がれるか、どう認められるかという若者たちの挑戦みたいなものだと思います。

例えば、さいたま市でピアノコンクールを開催すれば、それなりに人は集まると思います。しかし、NHKが主催しているコンクールもあって、日本でトップになったと思えるコンクールはそこだと思います。それは、イチローが大リーグを目指して、今は Yankees に行きましたが、ここは勝たなければいけないチームということで彼は燃えているわけですね。それと同じように、そこで勝つことに若いエネルギーを発散して、自分の青春をぶつけるというようなことだと思います。

だとするならば、これから新たにつくるわけですから、どのようなジャンルのものを、どのような方法で行うかだと思います。もちろん、コーラスのコンクールを開くのも良いのですが、先ほど言ったようなものが既に存在していて、その中で、さいたま市が行うコンクールはどういう価値になるのかということです。先ほど、申し上げたラ・フォル・ジュルネもここ10年で成功させました。ですから、そういうものを新たにつくって成功している例もあるわけですから、さいたま市でも開催することはできると思います。

しかし、現実的に考えると既にあるものの中に割って入っていくというのは、なかなか難しいと思います。例えば、賞金が1,000万円出るとしたら、それは少し意味が違ってきますけれども、さいたま市がトロフィーを出した位では、最上位とされているコンクールを目指していた若者がこちらを目指してくれるかということ、それは難しいと思います。

村木委員 今のお話に関しては、やり方次第だと思います。例えば小学生のみとか、中学生の

みとか、公募エリアをさいたま市のみに限定する形にして、あとは第1回とつけて、何回目までも続ける意識があれば可能だと思います。東京マラソンだって、継続しているからこそ応募が増えていっているのだと思います。

齊藤委員 どのジャンルで、どういう人を集めて、どういう方法で行うかというところに新しいアイデアがあって、今、第1回という話がありましたが、これをさいたま市は100年続けると打ち出せれば成り立つと思います。

村木委員 全く可能だと思います。第1回目に第1位だった子が、成長して活躍していけば歴史がつくられ、それが権威になってくる気がします。私はさいたま市でも開催することは可能だと思います。

事務局 今のお話に関連するかと思いますが、さいたま市では、政令市10周年を記念して、ジュニアソロコンテストを開催しました。それは、小学生・中学生を対象として管打楽器の独奏コンテストです。実は、第1回目は、全国から募集をしました。しかし、さいたま市として行う以上は、まずは市内ではないかということで、本年度は市内から募集をかけました。今後も議論が必要かとは思いますが、市民に向けた文化芸術の振興、さいたま市の文化芸術を外に向かって発信するという両面を、計画の中に盛り込む必要があると考えております。

山口委員 先ほど齊藤委員が賞金の話をされましたが、確かに賞金や賞品の効果はあると思います。ポーランドのブレハッチというピアニストは、浜松のコンクールで入賞し、その獲得賞金でグランドピアノを買って、その後、ショパンコンクールを制覇したというお話を聞きました。もちろん、それが全てではないと思いますが、賞金や賞品が大変な形に変わってくるということもあると思います。

また、例えば子供たちが欲しかった楽器が賞品としてあれば、それは夢のようなことで、大きな励みになると思います。

石上委員長 コンクール形式のものは、それなりにレベルの高い審査員がいて、そこに挑戦したいというモチベーションがないと中々つながっていかないですね。

大久保委員 先ほど村木委員がお話していた、一人のアーティストでは集客力がなくて、総合的なフェスタやイベント性があるものになると集客力が上がるということが大きなヒントではないかと思います。ですから、一つのコンクールではなくて、多面的であること、総合的であること、それによってあらゆる層を引き付ける側面を持つことができると思います。ですから、一つの芸術とか、さいたま市にちなんだものが望ましいですが、必ずしもそうではなくて、もっと総合的でイベント性があるもので、芸術というタグをはめるのではなくて、アートとかフェスタというものにしていく。それが成功の秘訣ではないかなと思います。

前回の会議での話とも重複しますが、新潟や岡山が、自分の土地にちなんだ芸術祭という形で少し規模が小さかったのに対して、横浜や神戸などのように、アートといいますか、フェスタ、イベント、そういうコンセプトで開催しているところは集客力を上げています。

村木委員　　今のことは、シンボル事業の一つのヒントになると思いました。フェスタのような形、例えば漫画などで言うと、コミケといわれているコミックマーケットが東京ビッグサイトで開催されていますが、こうしたものをさいたまスーパーアリーナに誘致することも一つの手だと思います。例えば、そうした機会に、けやきひろばなどを使って、盆栽や人形などにも触れてもらう場をつくる。シンボル事業として、既にあるものを誘致するというのも一つの手で、そういう事業を開催可能な施設があることは、さいたま市の強みだと思います。

また、先ほど山口委員がお話された中で、夢という言葉が一つのキーワードのような気がします。賞金や賞品という夢もありますが、本当に大事なものは、芸術家が本当に食べていけるのかということだと思います。コンサートでバイオリンを弾いていても、アルバイトをしている話などを聞きますね。やはり芸術家として成功している人たちを見せて、子供たちにそうなりたいと思わせることが一番の近道のような気がします。

山口委員　　偶然でしたが、以前、金沢駅に降り立った瞬間に、高校生のバンド演奏が始まって、これは何なのだろうと思いながら駅を出ましたら、すばらしいオブジェがあって、金沢はこんなにも変わったと感じました。また、そこでいただいたパンフレットを見ると、21世紀美術館ではこういうものがあるとか、そこでは有名なパティシエがつくったものを食べることができるなどの情報が掲載されていました。金沢というのはさいたま市と少し似ているといいますか、百万石の大きなまちで施設などが点々としていまして、歩いて行くには大変な距離に城跡があり、ホールもあつたりします。

まち全体がすばらしく、大樋焼もあれば九谷焼もある、窯元もあつて、食材のことなど含めて様々な要素があり、観光客はバスなどを使いながら、まち全体をめぐるわけです。

前回の会議でしたか大久保委員が、メインとなるものが必要というようなお話をされていました。メインとなる場所があつて、あとは色々と巡ることができるというのは、東京都内でも多くありますし、さいたま市もこうしたことができるのではないかと思います。文化芸術ということで、模倣ではなくて、創造性と、そこから生み出される何かという視点に立って、さいたま市にあるものは何かと考えてみました。例えば、荒川が縦に流れていて、中山道の宿場町が浦和から大宮のほうにつながり、氷川神社があり、それから、見沼通船堀など、全体的に歴史的な資源が多くあります。こうしたものを、無理につなげるのではなくて、フェスティバルという形で、何かつなげるような仕組みを考えるということもあると思います。

それから、さいたま市にはサッカーもあります。たまたま、スペインのビルバオというところでオペラを見たときに、グッゲンハイムを回って、美術館に行つて、夜は、ビルバオ対バルセロナのサッカーの試合があつて、各家から旗がたくさん出ていました。何か相乗効果があるような着眼点を持つと、すごくエネルギーがあることができるような気がします。

石上委員長　　あるものをうまく関連づけてイベントにしていくという発想ですね。

五十嵐委員　　子供が小さいときから音楽や演劇などの文化芸術に触れることは、本当に大切だと思います。そうした中で、先ほど村木委員のお話に関連するのですが、子どもたちが同じさいたま市出身の人の活躍を知ること、何かのきっかけになることもあると思

います。少しジャンルは違うかもしれませんが、旧大宮市出身の若田光一さんは良い例だと思います。そういったことを考えると、文化芸術の分野でも活躍している芸術家などと触れる機会を増やしていけたら良いと思います。

あと、先ほどサッカーのお話がありました。私もサッカーが好きで、小学校からフットサルをしています。この前、埼玉スタジアム 2002 に行きました。それは試合をしていないときでしたが、スタジアムツアーがありまして、大人は1人 500 円で、1時間かけてスタジアムを案内してくれました。選手のロッカールームやベンチ、ミーティングルームなど色々と見ることができました。子供たちも 20 人くらい参加していましたが、あこがれの目で選手が使うロッカールームなどを熱心に見ていました。文化芸術分野においてもこのような取り組みは重要だと思います。

<「施策7 文化芸術活動の場となる施設の充実」について>

石上委員長 今、施設の話が少し出ましたが、施策7は「文化芸術活動の場となる施設の充実」というテーマです。文化施設の管理・運営や機能の充実が例としてあげられています。今、話が出た施設見学のようなことも、この施策に関係してくるのではないかと思います。

五十嵐委員 埼玉スタジアム 2002 はワールドカップが行われた競技場ということで、施設そのものがサッカーファンにとってのあこがれです。しかも、サッカー専用スタジアムということでは日本で1番の収容人数を誇ります。横浜国際総合競技場の日産スタジアムは、収容できる観客数では多いのですが、陸上のトラックがある分だけ選手とピッチの距離があります。埼玉スタジアム 2002 は陸上トラックがないので、選手が蹴る音や指示の音が聞こえてくるので、すごく臨場感があります。

芸術家などにとっては、さいたま芸術劇場があこがれになるというか、そういう施設そのものが一つの売り物になると思います。

石上委員長 さいたま芸術劇場は、特殊なつくりをしているという話は聞いています。

山口委員 そうですね。特に音楽ホールは物を落とすと響きますね。

三須委員 残響時間は2秒で、一番良いですね。今は、施設の管理や機能を充実するという面ももちろん大切ですが、子供の頃から文化施設が、いかに身近にあるかを意識してもらおうという取り組みは非常に重要だと思っています。舞台機構がどうなっているかなど、意外と知らない人も多いと思います。ただ見に行って、家に帰って終わりというのではなくて、文化センターなどのバックステージを見せるということも重要かもしれません。中には、将来的に舞台技術のスタッフを目指す人も出てくるかもしれない。芸術の振興という側面を広く捉えれば、先ほどのアートという話もありますが、技術的な人を育成するようなども重要だと思います。

石上委員長 歌舞伎座が結構そういうことをしていますね。奈落を体験させてもらったり、早変わりの部分を見せてもらったり。

宮本委員 劇団四季もしていますね。

石上委員長 さいたま芸術劇場では何かありますか。

三須委員 子供たちを対象にした劇場体験ツアーがあります。奈落が落ちていくところに乗って、20mくらい落ちてくるとそれだけでも感動というか、目に焼きつくと思います。もしかしたら、それが文化芸術に携わるきっかけになるということがあるかもしれないし、少なくとも、劇場や文化施設を身近に感じる良い機会にはなると思いますので、こうした取り組みも良いかもしれませんね。

事務局 今、さいたま市における施設関係の問題という面で考えますと、関係者から大きな美術館を建設してほしいという要望があります。しかしながら、さいたま市は、旧4市が合併した都市ですので、少し規模は小さいですが文化施設は多くあります。ただ、約125万人の都市として、プロの芸術家の方々が発表の場とするには規模が少し小さいので、より規模が大きいものが必要ではないかということだと思います。しかし、それに応えられない状況にあるということがまず1点。

もう1点は、宿泊施設が少ないということです。要するに、スーパーアリーナをはじめとする集客力が大きい施設がありながら、その人たちが泊まれるところが少ない。結局、東京にホテルを取って、電車で大宮まで来て、鑑賞してお帰りになる。こうしたことは、さいたま市にとっての課題の一つであると考えております。

石上委員長 今の施設の現状は、普通に生活をしていると、なかなか気がつかない視点かと思えます。中くらいの施設は多くあるけれども大きなものがないというのは、どうなのでしょう。それは困ったことなのかどうか、実際に活動されている方はいかがでしょうか。

大久保委員 音楽についてはわからないのですが、美術館については、県のもは大きくて、市のもは小さいですね。先日、埼玉県立近代美術館のポール・デルヴォー展に行ってきたのですが、この展覧会は全国を巡回していて、市の美術館でも開催しているものです。それが埼玉では様々な事情があって埼玉県立近代美術館が選ばれたと思いますけれども、さいたま市でも相応の施設があれば、開催していたかもしれないと思いました。

石上委員長 宿泊についてはいかがでしょうか。フレキシブルな宿泊施設をつくるということでしょうか。

事務局 いえ、ホテル業界に進出してもらえないと思いますが、採算が合わないと見ているのだと思います。

石上委員長 結果として採算が合わないから進出してこないのではないのでしょうか。どうしても交通の便が良いですからね。そろそろ予定の時間が迫ってきておりますので、施策8に進みます。「関係団体等との連携、地域経済の活性化、産業振興」の点について、今、ホテルの話なども出ましたが、何かご意見がありますか。

<「施策8 関係団体等との連携、地域経済の活性化、産業振興」について>

大久保委員 最初に、これは結果としてついてくるものではないかと申し上げました。結果として、こういう地域経済の活性化や産業の振興が図られるためには、さいたまの中だけで何かしていたのではだめで、関東、首都圏からの集客が不可欠ということだと思います。そうすると、やはりそれだけの集客力を持つ一大イベント、シンボル事業のようなものを何か考えていく。そういう規模で考えないと、こういうものは結果としてついてこないということは、すごく感じています。

村木委員 先ほど事務局からお話がありましたジュニアソロコンテストのようなものを実施していることを知らなかったりするので、やはりPRが足りないのかなということを感じました。市報が郵便ポストに入っている、見るときもあれば、見ないときもあると思います。PRをするために、地元の関係団体なども含めて、やはりPRしてくれる人を探すということが、鑑賞機会を提供する上で大切な要素だと思います。結果としてついてくるというよりは、逆に言うと、結果としてついてくるためにPRを徹底しなければいけないと思います。

石上委員長 変な話ですが、「せんとかん問題」がありましたが、あれは結果的にすごいPRになりましたね。

村木委員 そうです。ゆるキャラも宣伝手法の一つかもしれません。

石上委員長 もちろんトラブルを誘導する必要はないと思いますが、何かそういう発信力があるもの、既存のものではなくて、違った発想で発信し、周知していくことも必要ですね。

村木委員 さいたま市のゆるキャラの「つなが竜ヌウ」は、あまり宣伝されていない気がします。映画館に行ったときに少し見るくらいで、コバトンのほうが知名度は高くなっているという感じがします。

石上委員長 そうですね。サッカーも全部キャラクターがありますよね。あと、B級グルメもありますし。「浦和うなこちゃん」もいます。

大久保委員 事業を行うためには、スポンサーも必要ですね。スポンサーがつかないと、結果として活性化もついてこないし、どっちが先ということではないのですが、やはりスポンサーにつきたくなるようなコンセプトを打ち立てなければいけないと思います。そうしないと何も始まらないのではないかと思います。

齊藤委員 市としては、何かを行う場合、スポンサーが必要とお考えになっていますか。

事務局 スポーツ関連では、さいたまシティマラソンというものがございます。スーパーアリーナをスタートとゴールにして開催していきまして、かなりの金額をかけて実施しています。企業等から協賛金もいただいておりますし、運営部分につきましては、多くのボランティアスタッフに支えていただいている状況です。ですから、今後、検討していく芸術祭、フェスティバルについても、ある程度、同様の方法を想定しています。

齊藤委員 100万人を超えた市は、大体独自の事業や大きなイベントを実施されていると思います。ですから、100万人を超えたところで、その独自色で何かをつくるということはどこも実施していますし、さいたま市も取り組んでいくべきだと思います。

事務局 スポーツもそうですが、文化芸術もお金がかかるということは、私たちも認識しております。また、そこには投資をしていかないと、全国にさいたま市を発信することは難しいと考えております。

石上委員長 基本的には、大きなイベントのほとんどは、市が主催ということにはなっていないわけですね、たいていの場合。実行委員会形式になっていると思います。そうすると、市の予算も入り、その他、国の予算も入ったりして、さらに企業協賛も入るといいう形になろうかと思いますが、堅い話になると盛り上がりませんね。

齊藤委員 東京都の石原都知事は、文化芸術に関して様々なことを行いました。そういう強い個性の人がいなくても、さいたま市レベルの市になったら、文化芸術を自分で独自に育てていく位の発想が必要だろうと思います。ですから、どこかまだ取り残して忘れてるところをうまくつかんで独自のものをつくり、それを振興する。その中で、協賛する企業もあるかもしれませんし、ボランティアも育てられるしというアプローチは、横浜市も、川崎市も、そういう動きが必要だと思うからおやりになっているわけです。東京都は、民間が始めたことをうまく活用したりしています。でも、それはそれですごいパワーになりましたね。やはりそこに東京都が乗っていることによって、大変な集客力とパワーを発揮していると思います。ですから、さいたま市として、コンクールでも、コンサートでも、何でも良いと思いますが、何が一番適しているのか、知恵を出し合って決めていけば良いと思います。

三須委員 今年、ツール・ド・フランスが来るのは、あれは市ですか。

事務局 10月26日に、さいたま新都心で実施します。

三須委員 せっかくスポーツ文化局でもあるわけですし、海外から多くのお客さんが来ることはチャンスですから、何か文化芸術をからめていければ良いと思います。

村木委員 さいたま市のスポーツコミッションが、今回、表彰されますね。スポーツコミッションが展開しているものは、文化よりも一歩進んだ形になっている気がするので、それを利用するのも手だと思います。

三須委員 そうですね。「文化」がそこにくっついていく。場合によっては、逆転しても良いわけですね。漫画の文化が世界に発信されたり、盆栽の輸出が盛んになったり。わかりませんが、何かのきっかけになると良いですね。

村木委員 スーパーアリーナもフェスタをしているのではありませんでしたか。

山口委員 世界フィギュアも来ますね。

三須委員　　あとは、さいたま市らしさというところも考えなければいけないでしょう。さいたま市は、政令市になって10区の特色ある区があるので、どこを会場にするかは問題になるでしょうけれども、各区が文化芸術の代表を出して、そこで、投票して、優勝したら、その区を会場にイベントを行うとか、何か面白さを加えたりするのも良いかもしれません。文化芸術を比べることは、なかなか難しいかもしれませんが、さいたま市には色々な区があって、この区には人形があるとか、この区にはサッカーがあるとか、区の特色を知ってもらおう。こうしたものを集客力、インパクトあるものに結びつけられると効果的だなと思います。

石上委員長　　やはり大きな、外からの力をまず使って、そして、そこに地域にあるものを絡めていくような感じですね。

三須委員　　国際漫画フェスティバルは、今でもやっていますよね。私もプラザノースで開催中に行きましたが、少し入場者が少ないと感じました。ワークショップの開催、プロの漫画家によるトークショーなど、もう少し何か仕掛けたほうが良いような気がします。

石上委員長　　そうですね。国際的なものが良いですね。

三須委員　　さいたま市は、政令市ですから国際的な部分も考えた展開が必要だと思います。

石上委員長　　そろそろ時間がなくなってきました。最後に、全体を通してのご意見やご質問等はいかがでしょうか。

村木委員　　施策6の「シンボル事業の開催」というのは、もし、行うとしたら、どのようなイメージをしているのか知りたいですね。

事務局　　具体的なことは検討中でございます。意見交換会や審議会でご意見をいただきながら、検討を進めてまいりたいと考えております。

石上委員長　　しっかり準備をして、行う方が良いという気がします。変に形だけ整えて、第1回を行ったとしても、大体は、第2回は開いて第3回はありませんというパターンが多いので、きちんと続けられるようにするにはしっかりとした準備が必要だと思います。

齊藤委員　　これは具体的にプロデュースする会議を立ち上げていく必要があると思います。そういう実務会議といいますか、そういう会議で、どのような方法があるのか、具体的なものを挙げて議論した方が良いと思います。計画には、市としては広く網羅した内容が書いてあることはわかりました。ですけれども、それを具体化するための集まりを開いていただいたほうが良いと思います。

三須委員　　意見を一つだけ。全体を網羅した計画ということなので、付け加えさせていただくと、体系的にはなっていますが、数値目標もありますし、7年間の計画になっているので評価も含めて、進行管理などについて書き込んで良いかもしれないですね。計画の推進にあたっては、全庁的に連携をして、福祉や産業からの視点など色々な意見

を得ながら展開していく必要があると思います。

石上委員長 ありがとうございました。そろそろ時間ですので、よろしいでしょうか。
 以上で全て終了しましたので、議長の職を下させていただきます。ご協力、ありがとうございました。